
過去と未来の時螺旋(スパイラル)

ユーリ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

過去と未来の時螺旋スパイクル

【Zコード】

N4457E

【作者名】

コーリ

【あらすじ】

夏休みの作文のタイトルがなかなか決まらない哀とコナンは、アイデアを考えやすくなるために工藤邸で涼む事になったのだが・・・
分岐小説第6弾にして、初のタイムスリップ物です。

(前書き)

原作にもあった、イタリアの強盗団のボスが描いた暗号です。
記号でどうしても描けない部分があったので、他の記号で代用しました。

凸 A
C

日 O
R O
< • >
<

私の名前は灰原哀。

江戸川コナン君の同級生で、少年探偵団の1人。

といつても、小嶋君達になかば強制的に入れられたんだけどね。

今日帝丹小学校では、夏休みの宿題内容を発表していた。

小林澄子「というワケで、夏休みの宿題は『将来の夢』についてです！みんな、良い作文を書いてきてね！」

「はい！」

生徒達が元気な返事をした。

その帰り道・・・

歩美達は、それぞれ自分の将来の夢について話していた。

その集団の中に、東尾マリアと坂本たくまもいる。

なぜ2人がいるかというと、怪人200面相騒動の時に仲良くなつたからだ。

歩美「歩美はやっぱり、スチュワーデスとかナースさんかな？」

光彦「ボクは、宇宙飛行士になりたいですかね・・・」

元太「オレはうな丼屋！」

光彦「元太君つたらうな重の事ばっかり・・・」

たくま「他にないのかよ・・・」

歩美「マリアちゃんは？」

マリア「ウ、ウチ？ウチは刑事かな・・・この前佐藤刑事の活躍見て、カツコええな～って思て・・・」

光彦「良いですね～！」

歩美「それで？コナン君と哀ちゃんは？」

コナン・哀「え？」

2人の声がハモつた。

コナン「オ、オレはまだ決めてないよ・・・（まさか早く元の体に

戻る事が夢だなんて、言えるワケねえしな・・・」

哀「私も決めてないわ・・・」

2人は即答した。

歩美「じゃあ、歩美達こっちだから！」

光彦「また休み明けにお会いしましょう！」

元太「じゃあな！」

コナン「おう！」

哀「また休み明けにね。」

「コナンと哀は、歩美達と別れ、帰路に着いた。

時は過ぎ、夏休みも終わりに近づいていたその頃・・・
哀は、困っていた。

なぜかというと、全く書く課題が決まっていなかつたからなのだ。
哀「困ったわ・・・もうすぐ夏休みが終わるというのに、書く課題
すら決まっていないんだもの・・・どうしよ・・・」
哀はしばらく考え込んだ。

哀が考え込んでいると、コナンが阿笠邸にやって來た。
ガチャ！

コナン「灰原、いるか？」

哀「何？工藤君。」

コナン「夏休みの課題何書くか、決まったか？」

哀「決まってないわ・・・だから困ってるのよ。」

コナン「そうか。実はオレもまだ決まってないんだ。」

哀「工藤君も？」

「ナン」「ああ。そこで提案なんだけどな、工藤邸で何かしないか?」

哀「工藤君の家に?」

コナン「ああ。このまま考え込んでたって埒があかないだろ? 何か気分転換した方が思いつくかもしれないだろ?」

哀「そうね。じゃあお言葉に甘えようかしら。」

そういうワケで、哀と

コナンは工藤邸で休む事にした。

「ナン」「ま、軽いお菓子しかないけど、くつろいでてくれよ。オレはちょっと仮眠してくるから。」

哀「ハア。」

コナンは2階へと上がって行つた。

哀はその後をコッソリついて行く。

2階に上がつたコナンは、まっすぐ自室に向かつた。

哀が後を追い隙間からのぞくと、コナンが探偵道具を机の上に置き、ベッドの中に入るところだつた。

コナンはそのまま、寝息を立て始めた。

哀はコッソリ忍び込むと、机の上から探偵道具を取り、持つて行つた。

哀は本棚がある部屋で、探偵道具をいじくつていた。

哀「じうじってメガネをかけて、時計型麻酔銃をつけて・・・うん、何か工藤君になつた気分・・・なんて、バカな事やってる場合じ

やないわよね・・・早く課題決めないと・・・

そつ言つう哀の目に、あるファイルが写つた。

哀「あら?」これは・・・

哀はファイルを手に取つた。

哀「『イタリア強盗団による金貨盗難事件並びに、大都会暗号解読事件』・・・これつて、工藤君が探偵団として最初に解決した事件じゃない・・・」

原作ではコナン達4人が最初に解決したのは幽霊屋敷の事件が最初ですが、アニメではイタリア強盗団の事件が最初でした。

哀はファイルをバラバラめくつた。

哀「フーン、6億とは派手なヤツらねえ・・・それにしても、工藤君達この時お礼とかもらえたのかしら? 被害総額の1割とか・・・」

もらつてません。

哀「私も1度でいいから見てみたいなあ・・・金貨15000枚・・・」

そんな事をつぶやいたその時、突然ファイルが光りだした。

哀「え! ? な、何! ?」

哀が驚いていると、光が哀を包み込んだ。

哀「あ・・・キヤアアアアアア! !」

哀はそのままどこかへと消えた。

それからしばらくして、コナンが降りて來た。

コナン「おーい、灰原。課題決まつたかあ?」

哀の返事はない。

コナン「あれ? どこに行つたんだ灰原のヤツ・・・ま、いつか。もう一眠りしよ・・・」

コナンはそう言つと、再び2階へと上がつて行つた。

哀「ん・・・」

哀はゆっくりと田を覚ました。

哀「私、いつの間に寝ちゃったのかしら？ねえ、工藤君。」

哀はコナンの名前を呼んだが、コナンの返事はない。

哀「あら？どこ行ったのかしら工藤君・・・」

哀はそう言しながら、外に出た。

哀は米花公園までやつて來た。

哀「とりあえず、米花公園に来てみたけど・・・誰かいるのかしらね・・・」

哀がそんな事をつぶやいていると、何者かがやつて來た。

哀「（あれは・・・吉田さん達？）」

そう、歩美達だった。

哀「わわわっ。」

哀はサッと茂みに隠れた。

歩美「コナン君遅いよね～。」

元太「本当だな。」

光彦「いつになつたら來るんですかね。」

哀「（江戸川君も來るんだ・・・）」

哀が耳を澄ませていると、そのコナンがやつて來た。

コナン「お待たせ、みんな！」

元太「つたぐ、遅えぞコナン！」

コナン「ゴメンゴメン！蘭姉ちゃんを」まかすのに手間取っちゃつて・・・

元太「オマエらもひやんと親に内緒で来たんだりうな?」

歩美「うん!」

光彦「当然ですよ!何たって、ボク達の目的はこの暗号に記されて
いる宝を探す事。親に知られたら没収されかねませんからね。」
哀「(宝ねえ・・・そんなうまくいくのかしら?つて、ちょっと待
つて!暗号・・・それに宝・・・まさか、私・・・タイムスリップ
しちゃつた!?)」

理解が早いようだ。

哀「(ウソ!何で未知の体験!あ、もしかして、イタリアの
強盗団をこの世界で捕まえれば元の世界に戻れるのかしら?)」
哀がそう思いながら見ていると、コナン達が東都タワーに行こうと
話していた。

次の瞬間、コナン達は走り出した。

哀「あ!」

哀は、見失わないようこつこつと歩いて行つた。

コナン達は、東都タワーに着いた。

哀は、影からじっと見ている。

コナンの推理により、洋服屋かも知れないと思つた彼らは、洋服屋
へと急いだ。

哀「(洋服屋か・・・あ、そうだ!変装用具買うのこちゅうじ良
いわ!)」

コナン達が走り出すと、哀は見失わないようこつこつと歩いて行つた。

哀は洋服を買って試着室で着替え、帽子をかぶつた。

試着室から出て来ると、コナン達が洋服屋から追い出されていた。

どうやら、間違えて女性が試着している場所のカーテンを開けてしまったらしい。

その後も哀は見失わずにについて行つたが、相変わらずコナン達は洋服屋から閉め出しを受けていた。

哀「（何してんのかしら、彼ら・・・）」

哀が呆れながら見ていると、コナンが本屋に行かないかと歩美達に持ちかけていた。

哀「（本屋・・・そういうえば、本屋で暗号の紙をコピーしたと資料に書いてあつたわね。）」

哀はチャンスと思い、再び彼らを尾行した。

本屋では、元太達がマンガを読んでいた。

コナンは暗号をコピーすると、O R Oの意味を調べている。

哀はコッシュソリと近づくと、コナンにぶつかった。

ドッ！

哀「あ、スマセン・・・」

コナン「いえ、こちらこそ・・・」

哀はそそくさと離れた。

実は哀、ぶつかると同時にコナンのズボンの後ろポケットに発信機シールを入れたのである。

これで、たとえコナン達を見失つても探す事ができる。

哀が本屋を出てからしばらくして、コナン達も出て來た。

どうやら腹ごしらえをするつもりらしい。

哀も、コッシュソリとコナン達について行つた。

歩美達は、大きな席でバー・ガーディ等を食べていた。

コナンは、ずっと暗号を解いていた。

哀は少し離れた席で、ヤイバー・ガーディを食べながらそれを見ていた。

哀「（工藤君、何だか難しい顔してる。そんなに難しいのかしら？）

「哀が不思議そうに見ていると、突然歩美が叫んだ。

歩美「あ・・・あゝ見て見て、あの看板！」

歩美は向こうに見えているカフェテラスの看板を指差した。

凸

歩美「2番目の図形にソックリじゃない？」

歩美の言葉に、元太と光彦は暗号を見た。

『凸』

元太「ホントだ。」

コナン「つて事は、もしかして・・・」の図形は・・・

コナン達4人は、店を飛び出した。

哀も、慌ててついて行く。

歩美「やつぱりそうよ！この店東都タワーの真ん前だし、きっとこの暗号、看板の形が並べて描いてあるのよ！」

看板の形を見た歩美が言った。

元太「じゃあ、ここに描いてある看板の形を辿つて行けば宝に！」

光彦「でも、この先2股に分かれますよ？せめてどの通りかわからないと、探しようが・・・」

コナン「通り？待てよ、確かこの通り・・・」

「コナンは地図を広げた。

『月見通り』

コナン「月見通り！まさか、タワーの横の月は月見通りを意味してるんじゃない・・・」

元太「とにかく行ってみようぜ！月見通りなら右側だな・・・」

「コナン達は走り出した。

ダツ！」

「ナン達はしばらく走っている。

タタタ・・・

光彦「あ！ありましたよ、逆三角形の看板！」

光彦が逆三角形の看板を見つけた。

歩美「ホントだ、3番目の図形にソックリ！」

コナン「じゃあ、やつぱりこの図形は・・・」

「コナンはそう言いながらメモを見た。

『

コナン「！？」

「コナンが何かに気づきそつちの方を見ると、『3メートル先 南部水族館』という看板があった。

コナン「（す、水族館！？そ、そうかわかつたぞ！）この暗号は、東都タワーから南部水族館までの地図！つまり、月見通りに点在する看板を描き並べた物なんだ！そして・・・そして・・・行き着く先には・・・金が！！（ゴールド）」

コナン達は、次の記号の場所を目指して走り出した。

その彼ら4人を、謎の3人組が不敵な笑みを浮かべながら見つめていた。

タタタ・・・

歩美「あ！あつあつ！蝶ネクタイ型の看板！」

歩美「ホラ、4番目の図形にソックリよ！」

「コナン」（やつぱりそうだつたんだ・・・最初の図形は東都タワー、その横の月は月見通りを示す図形！そして、最後の図形は南部水族館を表している！つまりこの暗号は、東都タワーと南部水族館をつなぐこの月見通りに、点在する看板を描き並べた物なんだ！！そし

て6番目の图形の横に記されたOROは、イタリア語で『金』を意味する文字……」

元太「よーし！後、看板2つだ行くぞーーー！」

歩美・光彦「オーッ！！」

コナン「（間違いない！）の暗号は金の在処を示した、宝の地図だ（ーーー）」

コナン達はしばらく走り回っていたが、一向に5番目の看板は見つからない。

光彦「ありませんねー、5番目の星形の看板・・・」

元太「クッソー！後ちょっとでお宝だつてのに・・・」

歩美「あれーーー、水族館に着いちゃつたよーーー」

コナン「ええ！？（ど、どういう事だ？月見通りは東都タワーから南部水族館までの道・・・この間に5番目の看板がないワケないのにどうして・・・？それとも、オレの推理が間違ってる！？）」

ポトツ！

コナン「・・・（あ、あの人は！？昨日東都タワーで会った、この暗号の本当の持ち主・・・何でここに？一緒にいるのは外国人・・・？）」

『逮捕されたカパネの仲間で、現在逃走中のイタリアの強盗団は3名だと判明・・・しかし彼らの行方と、彼らが1年前にイタリアで奪つたメイプルリーフ金貨15000枚の所在は未だわからず・・・』

『

コナン「！？（イタリア？金貨？）」

『なお、この3人組は・・・』

コナン「（3人組！？ま、まさか！？まさかアイツら、逃走中のイタリアの強盗団！？もしそうなら、イタリア語でOROって書いて

あるのもうなずける・・・待てよ?これを書いた人物がイタリア人
だとしたら、この用つて・・・)ー!?」

コナンは空を見上げた。

コナン「ー!」

3人組がコナン達を見ていると、コナンが歩美達に話しかけた。

コナン「ホラ、あれだよあれ!」

コナンはゴミ置き場の看板を指差した。

田

歩美「ホントだー、6番田の図形にソックリー!」

『曰』

光彦「でも、まだ5番田の星形の図形は見つかってませんよ?」

コナン「見逃しちゃつたんだよきっと・・・」

元太「とにかく宝だー!ゴミ置き場に宝があるんだよー!」

コナン達は、ゴミ置き場で探し物をしていた。

元太「つたくよー、ゴミばつかで宝なんて全然ねえぞ!」

光彦「変ですね・・・」

コナン「き、きつと・・・きつと清掃車がゴミと間違えて持つてつ
ちゃつたんだよ!!」

コナンは大声で叫んだ。

元太「そんなでけー声出さなくとも聞こえるよー!」

コナン「ゴ、ゴメン・・・」

元太「ちえつ・・・せつかく見つけた宝の地図なのによー・・・」

コナンは元太から紙を引つたくつた。

コナン「ホラホラ、男はあきらめが肝心!ー!
ポイッ!

元太達はため息をついた。

コナン「帰るうか?もう7時回つてるよー!」

元太「ヤベ、母ちゃんに怒られちまつ。」

コナン「じゃあボク、こっちだから・・・」

歩美「バイバイ、コナン君！」

コナン達が消えると、3人組がやつて來た。

「チツ、所詮ガキはガキか・・・それにしてもカパネの野郎、一体どこに金貨を・・・」

3人組が去つて行くと、その後ろからコナンが現れた。

コナン「（よし！これで大丈夫・・・歩美ちゃん達は家に帰したから安心だし、暗号はヤツらに戻したからもうつけ回される事はないだろう・・・しかしまああの暗号が本当に宝の地図だったとはね・・・さつきのヤツらの会話からすると、ボスが隠した金貨をその仲間が残された暗号を頼りに探してるのでトコか。へへへ、本屋でコピー取つておいたのは正解だつたな・・・そんじやー、そろそろ行くとすつか・・・宝探しによーー）」

コナンが動き出した頃、哀も行動を始めていた。

哀「（工藤君、動き出したようね・・・じゃあ、そろそろ私も・・・）」

哀は変声機で蘭の声を出すと、歩美達の家に電話をかけた。
歩美達を連れて帰らせるために。

哀「（これで、あの子達が彼について行く事はないでしょ・・・さて、私も行きますか・・・）」

哀は追跡メガネのスイッチを入れた。

哀「（工藤君の居場所は・・・ゴミ捨て場ね・・・）」

哀は走り出した。

「ナン」「（つたぐ、とんだ）ドジを踏んじまつたぜ……金貨の事を
OROとイタリア語で書く人物が、日本語の月見通りを〇で表すの
は不自然だ。あの〇の図形は、文字通り月そのものを示す印！そし
て月が意味する物は夜！つまり夜にしか見えない物……それは、
ネオンサイン……」

ザツ！

「ナン」「（やう、）〇の暗号はネオンの形を描き並べた宝の地図。つ
まり、上から順にその形と同じネオンの場所に行き、そこから見え
る次の形のネオンを辿つて行けば、金貨の隠し場所に行き着くハズ
……」

「ナンはネオンサインを辿り始めた。

「ナン」「（どうやら、今度は間違いなさそうだな……よーし、あ
の強盗団より先に金貨を見つけて、警察に……）

「ナンは先へと進んだ。

4番田のネオンまで辿つた「ナン」だが、そこで行き詰まつてい
た。

「ナン」「変だな、例によつて5番田の星形の図形が見当たらないぞ。
・・どこにあるんだ？」

「ナンは辺りを見渡した。

「ナン」「ん？ ま、まさか！」

「ナンは田についた観覧車に近づいた。

「ナン」「ほ、星形のネオン！ ！間違いない、5番田の図形と一致す
る。こんな近くにあつたなんて……」

『』

「ナン」「じゃあ、6番田の図形もここから……」

「ナン」が辺りを見渡すと、一つずつ点滅する光が見えた。

日

「ナン 「あ、あつた！6番田のネオンサイン……」

『田』

『鬼桜ビル』

「ナンはネオンが示す鬼桜ビルまでやつて來た。

「ナン 「ここに金貨があるのは間違いない……だけど、最後の魚型のネオンサインがどうしても見つからない……一体どこに……」

「ナンは辺りを見渡すと、最後のネオンサインの手がかりを見つけてた。

「ナン 「…そつかー…やつと見つけたぜ……光る魚をな……」

「ナンは鬼桜ビルの中に入つて行つた。

屋上まで上がつて行く。

「コナン 「思つた通り……あれが光る魚の正体だつたんだ！」

「コナンの視線の先には、水面に橋の照明が映つて魚型のネオンを作り出していた。

「コナン 「それにこの暗号には、金貨の位置までちゃんと描いてある。・・あの橋がこの暗号通りに見えるのは、恐らく1ヶ所だけだ！きっとそこに金貨が・・・」

「コナンは少しずつ後に下がつた。

「コナン 「ここだ！」

「コナンが位置を突き止めると、足下に金貨が落ちてきた。

「チャリン！」

「コナン 「ん？金貨・・・」

「コナンが真上を見上げると、黒い影が見えた。

「コナン、何だ、あの黒い影は!? ロープにつながってるみたいだな。そうか! 天井の梁にロープを通して、金貨の袋を上に吊してるんだ。ロープを止めてるのはあそこだな? よし、それが本当なら……」

コナンが駆け寄りロープを揺すると、金貨が下に落ちてきた。

「グッ!

「チャリーン!

「コナン、あつた! 金貨……よし、早く警察に……」

コナンが非常階段に向かおうとしたその時、前に3人組が立ちはだかつた。

「ザツ!

「コナン、え?」

「『苦労だつたな、ボウヤ……』

そう言つと同時に、四角メガネの男がコナンを抱き上げた。

フワリ・・・

「コナン、うわああ……」

「よくぞ暗号を解いてくれたもんだ。だが、ここまでだ。」

3人組は、不敵な笑みを浮かべた。

コナンは手足と体をロープで縛られ、柱につながれた。

「コナン、ぐ・・・うう・・・」

「コナンはもがいたが、一向に縄はほどけない。

3人組は、辺りを調べていた。

「コナン、金貨を探してる……? そうか、アイツらまだ金貨の場所がわかつてないんだ。おそらく、あの金貨は……」

「その通り……」

「コナンの元に、3人組が近づいて来た。

「この金貨は、オレ達が1年前にイタリアの銀行から奪つた物だ。」

オレ達のボス、カパネの指示でな。だがカパネはオレ達を裏切つてどこかへ消えちまつたんだ、奪つたメイプルリーフ金貨15000枚と一緒にな。しばらくしてヤツが日本にいる事を知り、オレ達がヤツのヤサに踏み込んだ時には、もうヤツは金貨を隠しちまつていたんだよ。当然、いくらヤツを締め上げても何も吐きやしねえし、ヤツの部屋から見つけ出したのはこの暗号だけだつた。仕方ねえからヤツの居場所を警察に通報して、オレ達はこの暗号を頼りに金貨の隠し場所を探してたつてワケだ。オマエと仲間達に出会つて、暗号を取られるまでな。」

コナンはドキッとした。

「最初は強引に取り返そうかと思つたが、オレ達にも解読できなかつた暗号をオマエがドンドン解いていくから泳がせていたんだよ。まさか、本当に見つけてくれるとは思わなかつたがな。」

そう言つと、丸メガネの日本人はコナンに拳銃を突きつけた。

「さあ言え、金貨はどこだ！？見つけたんだろ！？さあ早く！？殺されてもえか！？」

コナン「魚だよ・・・」

「？」

コナン「ホラ、その暗号に描いてある魚の図形と、あの橋の夜景が一致する場所に金貨は隠されているんだよ！」

「あ、なるほど・・・」

3人組はコナンからのヒントを頼りに金貨を探し始めた。

コナン「（アイツらが金貨を見つけ出すまでには時間がかかるハズだ。その間に脱出方法を考えないと・・・）」

コナンはそう思つて考えを巡らせた。

だが、3人組は思つたより早く金貨を見つけてしまつた。

「お、あそこか。見つけたぜ。」

コナン「そ、そんな！！もう見つけるなんて！？」

3人組はコナンに近づいて來た。

「さて、ど。目当ての物は手に入つたが、このボウヤビうするかね

？」

コナン「う・・・」

「もうしばらくオレ達と一緒にいてもうとするか。」

そう言つと、三角メガネの男がコナンの背後に回り、コナンの耳に布を巻いた。

キユツ！

コナン「わッ！――」

三角メガネの男は次にガムテープを取り出すと、ビットと切つてコナンの口に貼りつけた。

ペタッ！

コナン「むぐッ！――ん～ん～！――」

3人組は、別の準備を始めた。

哀は、コナンの体につけた発信機を頼りに、鬼桜ビルまでやつて來た。

哀「ここにいるのね、工藤君。さつきから目標が動いていないけど、何かあつたのかしら？」

そう言いながら哀が非常階段までやつて來ると、屋上のドアが開いた。

ガチャ！

哀「ヤバ・・・」

哀が階段の裏手に隠れると、四角メガネと三角メガネの男がジュラルミンケースを2つずつ持つて降りて來た。

哀「アイツら、イタリアの強盗団？」

哀が緊張しながら見ていると、降りて來た2人がケースをトラックに積み込んだ。

そして、また上へと上がつて行く。

しばらく繰り返した後、2人が2つのジュラルミンケースをトラック

クに積み込みそのままトラックの運転席と助手席に乗り込んだ。

これが最後だろ？

その後、屋上のドア絡まるメガネの男が出て來た。

哀「（あ、あれば・・・工藤君！！）」

丸メガネの男の肩に、手足を縛られ田と口を塞がれたコナンが担がれていた。

コナン「ん、ん・・・」

丸メガネの男はコナンを担いで降りて來ると、トラックの後部座席に乗り込んだ。

トラックはそのまま、発進していった。

ブオオオオオ・・・

哀「た、大変！工藤君がさらわれちゃったわ！」

哀はコナンが連れ去られた事に驚いたが、すぐに落ち着きを取り戻した。

哀「（工藤君には、本屋で発信機を取りつけてある。それを辿れば、救出できるわ！！）」

哀はメガネのスイッチを入れた。

哀「車で移動中のようなね・・・ようし！」

哀は少し走ると、タクシーを止めて乗り込んだ。

哀「（待つててね、工藤君！！）」

哀を乗せたタクシーは、走り出した。

3人組は、廃墟となつたホテルの1室に來ていた。

「フフフ、無事に金貨が見つかって良かつたな。」

「ああ、これでオレ達の苦労も報われる。」

「ところで、この子供どうするかね？」

そう言って、四角メガネの男は床に転がっているコナンを見た。

コナン
ハ
ハ
・
・
・
・

コナンはもがいている。

「とりあえず、コイツの保護者の住所を突き止めて金をいただくか。

3人組は二ヤリとした。

コナン、ん~!!

「二十九番は必死に叫んだが、力ムテ一々のせいで声はならぬし

とおえ? たゞ、何語してゐるか

「ふ、口ナシを無視し、

しばりへかねと、田暮が電話を取つた。

日暮「はい、もしもし。日暮だが。」

今スカラをかにした小学生を預かっている

「コイツの保護者」

して杯戸町のアパートまで持つて来いとな。」

丸メガネはそう言つと、電話を切つた。

丸メガネの男は口を閉じた。

コナン「んつ、んんつ・・・」

がれいをいたが始末するもあらか……」

ジャキッ！

תְּנַנְּנָהּ וְהַנְּנָהּ

「アハハ、懲り悪ひなよ

男達が拳銃の引き金を引こうとした、その時・・・

「ナーナードル...」

「な、何だ！？」

男達が振り向くと、帽子をかぶりメガネをかけた哀が立っていた。

哀「その子は返してもらつわよ？」

「な、何だオマエは・・・」

男がそう言つ前に、哀はボールを射出した。

ポンッ！

そして、キック力増強シユーズでボールを蹴り飛ばした。

ドンッ！！

「ガハア！！」

男達は吹っ飛ばされ、氣絶した。

哀「大丈夫？」

哀は帽子を脱ぎコナンに駆け寄ると、手足の縄を解き口のガムテープをはがした。

ピリリ・・・

バサツ・・・

コナン「あ、ありがとう・・・君は一体何者なの？」

コナンは哀に質問をする。

哀「今はまだ明かせないわ。その内また会つ事になるでしょうから、楽しみにしといて。」

そう言つと、哀はコナンを置いてその場を去つて行つた。

その後、コナンは警察に通報し、イタリアの強盗団は無事逮捕された。

その瞬間、離れた所にいた哀は光に包まれ消えたのだった。

そして、学校再開の日

澄子「では、『将来の夢』についての作文の発表です。」

澄子の声で、発表が始まった。

順番は出席番号順等ではなく、手を挙げた者順である。

歩美はスチュワーデス、光彦は宇宙飛行士、元太は家の酒屋を継ぐといつ。

マリアはたくまと一緒に刑事になるとの事。

澄子「さて、次は誰が発表しますか？」

澄子がそう言つと、コナンが手を挙げた。

コナン「はい。」

澄子「では江戸川コナン君、発表してください。」

コナン「わかりました。」

コナンは隣の席の哀に対し笑顔を見せ、席を立つた。

哀はその笑顔の意味がわからなかつたが、次の瞬間その理由がわかつた。

コナンの発表内容が、その答えたからだ。

コナン「ボクの将来の夢、それは・・・隣にいる灰原哀さんのお嫁さんになる事です。」

哀「え！？」

哀もクラスメイト達も驚いてしまつた。

よもや、コナンの口からこんな言葉が飛び出すとは。

哀「え、江戸川君、そこはお嫁さんじゃなくてお嬢さんが正しい・・・じゃなくて！ど、どうして私なんかの嬢に！？」

哀は少し赤くなりながら、コナンに聞いた。

コナン「だつてオレ、君に一度助けられたじゃない。覚えてないの？」

コナンは哀の事を『君』と呼んだ。

哀「き、君つて・・・（待てよ・・・確か私、タイムスリップしたあの世界で・・・）」

哀はあの世界で自分がやつた事を思い出した。

哀「（そ、そうだ・・・私、あの過去で江戸川君を助けたんだったわ！）」

コナン「思い出した？」

哀「え、ええまあ・・・（そつか・・・私が過去の結末を変えたか

ら、江戸川君の私に対する態度が変わったんだわ！－」
哀は焦った。

コナン「あの日からずっと、君の事だけを考えてた・・・そして、
昨日やつと自分の気持ちに気づけたんだ。灰原哀さん、オレとつき
合つてください！」

コナンの思いきつた告白に、哀はあつという間に赤面した。

クラスメイト達は沈黙している。

数秒後、哀の口が開いた。

哀「は、はい・・・喜んで・・・」

哀は真っ赤っかになりながら言った。

コナンと哀のカップル成立に、クラスメイト達は暖かい拍手を送り
祝福した。

こうして、コナンと哀は晴れて恋人同士となつたのだった。

完

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4457e/>

過去と未来の時螺旋(スパイラル)

2010年10月28日05時01分発行